

54 子どものころは、父を殺したところ中国の少年兵をいじめたことがありません。

55 でもね、今思えば、その少年兵がどんなに腹を立てたか、分かるような気がするんです。56 だって、敵の風が、わがもの顔で、自分たちの空を飛んでいるんですもの。57 ひょっとしたら、その人、自分の家族を日本軍に殺されたのかもしれないね。

58 敵も味方もなく、世界の国々のいろんな風が仲良くあげられたら、どんなにいいでしょう。

59 父も、きっとそれを望んでいたにちがいありません。

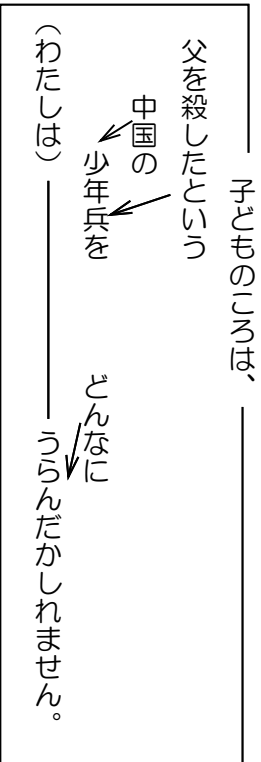
60 この六角風を見ていて、顔も覚えていない父の、そんな夢が伝わっているような気がします。

文図・語彙・文法

● 書かれているなかみ(映像・感情・説明)
 いよいよ最後だ。

話をしている現在に立ち戻って、心境が描かれている。

ここでは、児童文学としては珍しく、加害者としての認識もさしこめられる。この作品の「理想」が提示されているところだろう。*「理想」というのは、いわゆる「作者の述べたところ」とはちがう。



【恨む】(動ク五「四」)

(1) 人から不利益を受けた、としてその人に対する不満や不快感を心に抱き続ける。「招待されなかったのをー・うらんだ」

(2) 「憾む(恨む)の(思)い通り、あるいは理想通りならならいことを残念に思う。」自らの不勉強をー・む「む」

(3) 不満や嘆きを人に訴える。うらみ言を言う。

「松島は笑ふが如く、象潟はー・むがうらみ奥の細道」

(4) 復讐をうらみ言で促す。「一太刀ー・む」む

T 父あ、いよいよ最後です。

C この文は、このことだ。

C 子どものころ

C わたしが子どものころ

T わたしが子どものころだ。その頃は、どうだったっ。

C どんなにうらんだかしれません。

T まだ、こんな書き方だね。つまり、どうしてどうして。

C ものすけうらんだ。

C すく腹が立って、にくかった。

T どんなにうらんだかわからないくらいうらんだんだ。

C 少年兵を

C 中国の少年兵

C お父さんを殺したという、少年兵

T そうだね。ここで、何かわからなっ。

C お父さんを殺したのは、少年兵だった。

C 少年だった。

C 子どもだったんだ。

T 少年兵というのだから、子どもの兵隊だったんだ。今でも、

よその国には、そんな少年兵がいる国もあるらしい。そんな

子どもまで兵隊になって、日本と戦っていたということだ。

それに、お父さんを殺したのが、少年兵だとわかったのは、

どうしてだろうっ?

C お父さんが撃たれたあと、つかまえた。

C 日本軍が、撃ち殺したのかも知れない。

T そうなんだよね。どちらにしても、その少年兵は、殺され

ただろうな。そうやって戦ったのは、さっきまで、巴御前の

風を見ながら、自分の子どものことや家族のことを思ってい

た人たちだ。その人たちの敵が、少年だった。子どもだった

んだ。みんな、どんな気持ちがしただろうねえ。

T さて、子どものころのわたしは、うらんでいた。

いまきえるじ、
わがもの顔、

「その少年兵が——どんなに腹を立てたか、
わたしは）——分かるような気がするんです。」

- T では、次は？ わがもの顔、しなごころ。
- C くらいが？
- T うらんでいたという気持ちと食いちがう気持ちになっている。子どものころは、今はっきのような気持ちだったけど、今度は？
- C 今
- C 今きえるじ
- T 子どものころはうらんだけど、今、きえるじ、ちがうんだ。今は、どうなの？
- C わかるような気がする。
- C その少年兵がどんなに腹を立てたかわかるような気がする。
- T その少年兵がどんなに腹を立てたか、というのは？
- C その少年兵が、すぐ腹を立てていた。
- T そのことが、わかるような気がする。「わかる「じゃなくって、「わかるような気がする」。
- C 想像。
- C そんな気がする。
- C 本当かどうか、わからない。
- T そうだけどね。でも、お父さんを殺した相手の気持ちが考えられるなんて、すごいなあ。こついのを、本当の想像力というんだ。

敵の風が、
自分たちの空を
飛んでくるんですもの。

わがもの顔で、

わがものがお【我が物顔】(名・形動)
自分のものめいはいは自分の領域であめいこついな顔や振る舞い。
また、そのよついなびき舞。

「「振る舞」の「舞」が「舞草」が「舞草」

- T とこころで、腹を立てたと思っているけど、何に腹を立てたかは、次を読まないといけない。読んでみよう。
- C 「だって」でつないでめるよ。
- C 理由。
- C 少年兵が腹を立てた理由
- T その理由が、どうだと思ったかというの？
- C 敵の風が飛んでいる。
- C 自分たちの空を飛んでくる。
- C わがもの顔で飛んでいる。
- T 風が飛んでいるというのが理由だっていうんだ。
- C この風は、巴御前
- C わたしの風
- T うん。友江の風。でも、少年兵からするんじ。
- C 敵の風。
- T 日本は、自分たちの土地にせめてきた敵だ。その敵の風が飛んでいる。飛んでいる場所は、自分たちの空だ。最初を思い出しうらんで。
- C 中国の子がむかで風をあげていた。
- T そうだよね。本当なら、自分たちが風をあげる筈だ。そこに、敵の日本の風があがっている。
- C しかも、そのようすが？
- C わがもの顔で。
- T わがもの顔ってわかる？
- C よそなのに、自分のところみたいな顔をしていること
- T うん。自分のところでもないのに、えらそうにしているよ。うなときに、わがもの顔でっていうんだ。そういうのを見たら、どんな気持ちになるだろう？

「日本語の文法 p229へも参照」

ひよっとしたら、

自分の家族を

日本軍に

その人、
殺されたのかもしれないね。

ひよっと (副)スル

(1)不意に。突然に。「一思いつく」「一顔を出す」

(2)万一。ひよっとして。ひよっとするよ。

(3)物突き出るさま。にゅっと。

——したら

もしかしたら。ひよっとするよ。

——して

もしかして。万が一にも。

「一火事になってもなったらどうする」

——するよ

もしかするよ。ひよっとしたよ。

「一函になるかもしれない」

かもしれない 押し量

受け身 (既出)

能動文「お父さん、加害の立場がはっきりしますよ。」

C 腹が立つ。

C えらそうするなって思う。

T 勝手に自分のところにきて、わがもの顔でやられると腹が立つ。そんなことを、わたしは想像したんだ。それだけじゃない。まだ、想像している。

T 次の文を読んでみよう。

「ひよっとしたら、くしれない」って言っている。どういうこと?」

C もしかしたらって、想像している。

C もしかしたらこうかもしれないと思っている。

T わたしは、いろんなことを想像しているんだ。

この文の場合は?」

C その人、殺されたのかもしれない。

C 自分の家族を殺されたのかもしれない。

C 自分の家族を日本軍に殺されたかもしれない。

T 戦争中だからね。たくさん中国の人も殺された。そういうことは、戦争が終わってから、みんな知ったんだ。

これ、前にやった、受け身の文になっている。やった側のほうからのおすとどうなる。

C 日本軍が殺した。

C 日本軍が自分の家族を殺した。

T どんな感じがする。

C なんか、怖い感じがする。

C 日本軍が悪い。

T そうだね。もし、そんなことがあったら、その中国の少年はびびるだろう?」

C 日本軍がくし。

C 腹が立つ

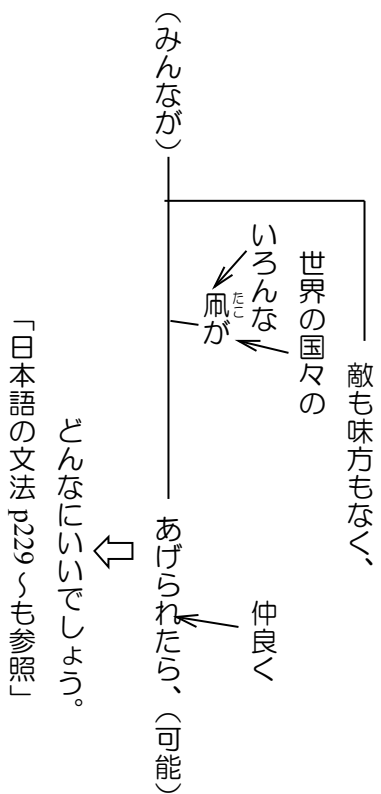
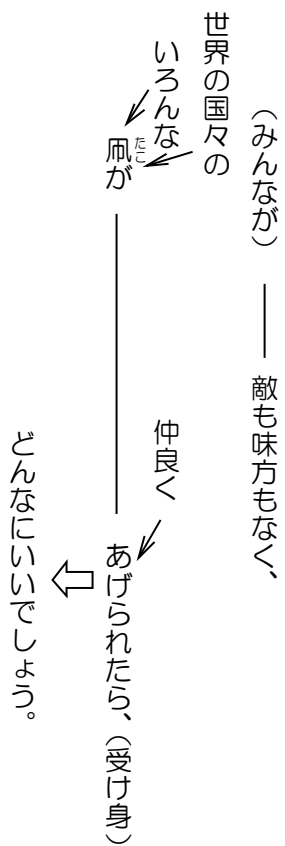
C やり返してやりたくなぬ

T そういう気持ちになるのもわかるよ。うな気がするよ。

でも、わたしのお父さんまっ

C 殺された

T そうだよ。それが戦争だ。だから、最初は、少年兵をうつらんだ。でも、いろいろと知ったり、考えているよ。その少年のこともわかるよ。うな気がしてきました。はい、おま。

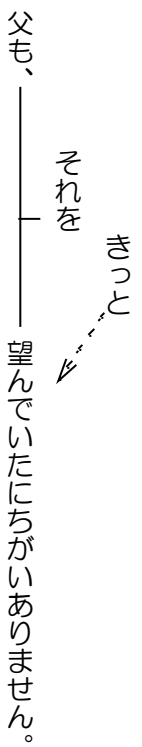


「日本語の文法 p229 ～も参照」

みんながこうじゃない。

受け身か可能か？

*どっちでもあっても、平和を望む気持ちの強みがかわりはない。



みんな (既出)

「みんなが」と「ちがうみんな」

11月の成立の度命をあらわす文で使う。前者は可能性がゼロではない。後者は可能性が100パーセントに近い可能性がある。

「日本語の文法 p223 ～参照」

- T そして、わたしが思うじや。まず、どうだって？
- C 敵も味方もなく
- T 敵も味方もないということとは・・・。
- C 世界中が平和になるじや
- T 平和な世界のことだ。そこで、どうだって？
- C 風があげられたらいい。
- C 世界の国々の風があげられたら
- C いろんな風があげられたら
- T 仲よくあげられたら
- C そうだね。自分の空なんて言わずに
- C みんなの空
- T そこに、世界中の人がいろんな風があげられたらいいなあ
- C と思っているんだ。そのためには
- C 平和じゃないといけない。
- T そうだよね。お父さんは、風をあげ、それをおろそうとして殺された。風で殺されたんだ。そうではなくて
- C 敵も味方もなく、仲よく風があげられたらいい。
- T これは、わたしの願いだ。こうなったらいいなあ。そして、それはわたしだけじゃないと思うている。次の文に行くよ。
- T だれのじや。
- C 父
- T 父もどうだって。
- C それを望んでいたらちがいない。
- T それって言ひのね。
- C 敵も味方もなく、世界の国々のいろんな風が仲よくあげられたらいいじや。
- T その望んでいたらちがいますか？って言うのね。「ちがいない」というのね。
- C 絶対そうです。
- C お父さんなら、絶対そう思う。
- T そんな気持ちをあらわす言葉が書いてあるね。
- C ねって
- C きっと望んでいたらちがいませんというんだから、絶対、かならずそうですってことね。
- T とても強く思っているんだ。想像だけだね。お父さんは、殺わわってしまっているから、わからない。でも、お父さん、ね、ねって望んでいたらちがいないじやないか？
- C どうして、そんなふうに思うようになったかと思うっ？
- C 中国に行ってまで、風を作ってあげていたから。
- C 風は、日本だけのものじゃなくて、世界中にあると思ったから。
- C 風が好きだから。
- C 風は、みんなを楽しくさせるから。
- T 今までのところで、きくと、お父さんはそう望んだらどう

この六角風だじを見ているよ、

顔も覚えていない

父の

そんな夢が



——伝わってくるような気がします。

なと思えるところがたくさんあった。吉野さんから、そういうことを聞いて、お母さんも、わたしも、そんなふうに思うようになったのかもわからないね。その辺のことは、みんな、じっくりと考えてほしい。

T さて、いよいよ、最後の文です。

どういう文になっているの？

C そんな夢が伝わってくるような気がします。

C 夢は、父の夢。

C 顔も覚えていない父

T いいね。そんな夢のなかみは、もういいね。でも、わたしは、父の顔も？

C 覚えていない

C だって、生まれたての赤ちゃんだったんだもん

T 父の顔も知らないけど、夢はちゃんと伝わってくるんだ。そんなふうに考えるのは、いつもというわけじゃないけど。

C この六角風を見ているよ

T この六角風というのは？

C わたしのために作ってくれた田御前の風

T そうだね。

T あれっ？ するよ、この文は、最後の文だけど、ここが「つながらない？」

C 最初にもよる。

C これ、わたしのだからです。

C どうですか、さっぴいちゃん。

C 父が作ってくれたんです。

T そうだね。それじゃながね。

すると、最初にはわからなかった、「わたしのだから」のなかみもわかるような気がします。」「さっぴい」の意味も。

T 次に、これまでの記事を整理して、今のところも読んでほしい。

T 最後のページで、まだわかることがありますか？